
 學 會

第37回日本皮膚科學會岡山地方會

(昭和12年12月26日午後1時より岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室に於て)

 數理的に觀たる5種微毒血清反應の
 鋭敏度に就て

石 天 之 樞 (岡山)

 Originalに譲る(岡山醫學會雜誌, 第50年第4
 號に發表の豫定)

「オクテン」の藥理學的研究 (第3報)

三 宅 慎 治 (岡山)

 原著として既に岡山醫學會雜誌第49年第11號
 に發表せり。

遊走腎の2例

德 重 一 志 (岡山)

 本症の主なる症候は胃腸障碍, 神經症狀, 腎疝
 痛發作の外, 合併症に由る症狀を表はし其の狀多
 様にして一定せず。演者は最近我教室に於て入院
 治療せる2例の本症に就き臨牀的所見を報告せ
 り。第1例は25歳男子にして右側に本症を有し,
 第2例は26歳男子にして同じく右側が罹患せり。
 何れも Guyon 氏法に依り手術固定せるが経過全
 く良好なりき。

色素性蕁麻疹の1例に就て

黒 山 眞 吾 (岡山)

 余は21歳の女にして商業をなす大熊某なる患
 者に就て報告せり。患者は7歳頃より胸腹部に黃
 褐色の斑點の存するを氣付けり。これは長年月に

 於て増減する事なし。ワ氏反應, ブラウニング氏
 反應, 村田及びマイニツケ第2清澄反應, ビルケ
 氏皮内反應共に陰性にして皮膚表記症陽性なり。
 組織學的所見によりて本症の病型は Unna 氏型な
 ることを知る。詳細は原著に譲る。

壞疽性丘疹狀結核疹の1例

前 田 哲 夫 (岡山)

 著者は結核の既往症なき中年の男子に發生した
 壞疽性丘疹狀結核疹の1例を報告せり。著者は
 「T. A. F.」の皮下注射を施行し局所には太陽燈照
 射及び「タルタリン液」外用を行ひ効果を上げつつ
 あり。

 腎臟結石に於ける「ピエログラム」の
 研究

江 原 敏 夫 (岡山)

 腎臟結石患者の「ピエログラム」上の腎臟腎盂並
 に結石の面積を「プラニメーター」にて測定し, 又
 腎臟の長徑横徑を「ノニユス」にて測定し, 其の
 結果を發表せり, 詳細は原著に譲る。

禿髮症の2,3の異例に就て

和 田 雅 之 (岡山)

1) 毳毛の圓形禿髮症

 6歳女兒, 後頭部及び左肩部に脱毛有り。2錢
 銅貨の定型的圓形禿髮症なり。該部の毳毛は普通
 以上に發達し居りたるため既に患者の母親は之に

氣付き居たり。左 II 大臼齒に「カリエス」ある以外所見を認めず。

2) 特殊の形をとれる機械的禿髮症

16 歳中學生、學帽の縁邊に當り頭部を 1 周して帶狀禿有り、特に徽章の當る部分に著し。

3) 全身的圓形禿髮症

21 歳男、一時は全身に殆ど一毛もなき迄に脱毛せるも其の後陰毛のみ再生せり。同部の毛髮は白毛なれ共毳毛の如き發育不良なるものなりき。植物神經系及び全身的に特記す可き所見なし。

4) 白髮を再生せる圓形禿髮症

48 歳女、染毛劑「るり羽」使用後猛烈なる皮膚炎を招來し 1 箇月を経て全治す。其の後 4 箇月を経て頭部に數箇の圓形禿を生じ漸次擴大し全頭部に 1 毛もなき迄に至り其の後治療によりて毛髮は次第に再生せるも總て白髮にして之は (3) と異り發育の充分なるものにして色素なき點以外は何等普通の毛と變りなし。此白毛は日を経るに従ひ黒色となり再生し初めてより約半年にして黑白相半ばするに至れり。尙ほ患者は健康時多少の白毛有りたるも不便を感じる程には非ず近隣の人の奨めにより染毛劑を使用せしものなりと。

性的神經衰弱に對する Androstin 療法

和田 雅之 (岡山)

詳細は近日原著として發表す。

再び尋常性天疱瘡症に就て

橘 英基 (岡山)

患者は昭和 12 年 8 月 4 日の初診にして 72 歳男子、生來頑健なりしが 4 年前より兩側下腿外面に「タムシ様」發疹出現し痒痒あり賣藥を用ひたるも根治せず又擴大する事もなかりしに本年 5 月痒痒性發疹は胸部背部に擴がり同時に散在孤立せる大小水疱を生じ遂には殆ど全身に無數の水疱を生

ずるに至りたり、水疱内容は容易に化膿する事なく、破れて漿液性内容を漏出し、大小の糜爛面を形成す。Nikolkysches Phänomen (+) Jod-kali 貼布反應(-)、植物神經系統機能検査は Pilocarpin, Atropin, Adrenalin に對して何れも特に異常を呈せし事なし、Blutbild に於ては「エオジン嗜好性細胞」の著明なる増多を認め、赤血球沈降速度は著しき促進を示せり、入院治療中、一進一退なりしも入院後 11 日目の尿検査に於て突然赤血球を認め、膀胱鏡検査に於て右側輸尿管口に「ミミズ様」Blutcoagula の懸垂せるを認めたり。血尿は約 10 日後止む。其の後次第に Malasmus に陥り入院 84 日にして死の轉歸をとる。

レクリングハウゼン氏病の 1 例

伊 藤 誠 爾 (岡山)

初診 昭和 12 年 2 月 19 日、52 歳木工職の男子 15 年前左側顎下部に蠶豆大無痛性の腫瘍 2 箇を生じ次第に其の數を増し殆ど全身に生ず。美容上其の治療を求むるため當科外來に来る。該腫瘍切除す。

胃護膜腫の 1 例

伊 藤 誠 爾 (岡山)

初診 昭和 12 年 6 月 21 日、食慾不振、胃部膨滿感並に胃部疼痛を主訴とする 61 歳の男子にして血液検査、「レ線」所見、胃液所見に依り確診し Neo-Aktivarsan 總量 (5.25 g)、Milaneuen 15 回注射して治癒せしめたり。

先天性表皮水疱症の臨牀知見補遺

大道 峰 雄 (岡山)

最近我教室を訪れたる先天性表皮水疱症の患者に就て詳細なる身體各種機能試験を行ひたるを以てこれが綜合成績に就て文獻上發表せられたる症例と比較検討して不日原著として發表せんとす。

皮膚電解質に就て (第4報)

西川 規 夫 (岡大)

近く原著として發表すべし。

癩と誤診せられたる レツクリングハ
ウゼン氏病の1例

難 波 政 士 (長島)

F. U. 男 47 歳

初診 昭和 12 年 12 月中旬

家族歴 祖父母は何れも死亡せるも皮膚は健康なりしが如し、父母何れも生存、母は健康、父は胃疾患あるも皮膚健康なるが如し、同胞4人あるも別に皮膚異常なしと、妻なし。

既往歴 何等特記すべきことなく發病に到る迄健康なりしが如し、青春期も性慾の方面より思惟するに遅れたるが如きこともなし、約4年前右側半身不隨となる。

現病歴 17—8 歳頃、腰部に腫瘍を生じたりと、爾來時と共に背部、胸部、腹部、頸部に同様の小腫瘍散在性に増加し來れりと。

現症 體格栄養中等、身長 1m44、體重 44.0 kg 姿勢、骨格異常なし、毛髮發育尋常、智能は癡愚に近し、右側半身不隨あり、パバンスキー(+), 血液村田氏反應強陽性、マントー(-), 光田氏反應(+), 尿、糞便共に異常なし。

皮膚所見 皮膚に半米粒大より拇指頭大の柔軟弾力性を有する腫瘍無數にあり、小なるものは大楕半球狀に皮膚面より隆起せり、大なるものは乳頭狀に或は更に「ポリープ様」に隆起し、皮膚は柔軟、弛緩性なり、柔軟なるものに到れば内容を全く還納し、恰も陰囊様に腫瘍皮膚のみを残す如きことあり、分布状態を見るに軀幹前面、小指頭大以上 8 箇、小豆大 36 箇、以下無數なり、殆ど融合することなく孤立性に存す、軀幹後面、小指頭大以上 8 箇、小豆大 40 箇、以下無數、項部米粒大よ

り小豆大のもの約 20 箇、四肢には大なるもの少し、顔面に於ては僅に數箇存するのみ、全身殆ど雀卵筵様の小色素斑に覆はれ軀幹に於ては更に大なるもの多く鶏卵大のもの右乳頭下に存す。

各神經幹を觸るるに腫瘍見得られず。

摘出腫瘍所見 前胸部皮膚腫瘍 2 箇、小指頭大及び豌豆大のものにして、剖面帯紅白色にして半透明膠様をなし、組織標本に於て表皮組織中基底細胞層には所々に色素顆粒多き所あり、眞皮毛細血管周圍に圓形細胞集簇を所々に見る、眞皮中に眞皮結締組織と劃然區別し得らるる殆ど圓形の異常組織塊を見る、一見纖維腫様の密なる纖維よりなり周邊部に於ては表皮と平行に走り中央部にては或は渦流狀に或は蛇行狀に殆ど無規則に種々の方向に走れるを見る、核は紡錘形、橢圓形にして Chromatin arm なるもの無數に存在す。

ワンギーンソン染色によりて腫瘍構成纖維は橙黃赤色に染まる。

ワイゲルト氏「エラスチカ染色」によれば腫瘍組織中には弾力纖維非常に少し。

「ポリクロームスメチレンブラウ」で染色し見るに「マスト細胞」相當に多し。

「ズダン III」染色によれば比較的僅少なれども神經髓鞘の黃赤色に染まれるもの腫瘍纖維走行に沿ひ走れる狀腫瘍周邊部に又腫瘍外結締組織中にも見られる、何れも血管に沿ひ走れるもの如し、又 Perineurium を有せる太き纖維束腫瘍中底部に見らるることあり。

クルチツキー氏染色法によれば濃藍色の髓鞘走行せる狀明かに見らる、幅に廣狹あり土筆の袴狀に見らるるものあり、珠數狀に見らるるものあり、腫瘍外邊部、腫瘍根部に比較的多く見らる。

ビルシヨウスキー氏法によれば腫瘍周邊部に比較的多く束狀をなせる軸索を見る。

猶ほ所謂「ズダン嗜好性顆粒細胞」は此例に於て

發見し得ず。

血液所見 血色素量 89%, 赤血球 399 萬 5 千, 白血球 7 千 6 百箇, 中性多核白血球 47.2%, 淋巴球 42.4%, 大單核白血球 8.8%, 「エオジン嗜好細胞」1.8%.

腦脊髄液所見 水様透明壓 (坐位) 355 mm 細胞 2 Pandy (一), Nonne-Apelt (一)

血液沈降速度 30 分 15, 1 時間 50, 2 時間 85, 中等價 46.2

植物性神経系機能検査 「アドレナリン」(一), 糖尿 (一). 猶ほ Iris に Knötchenbildung を數箇見る.

此患者はレ氏病の奇異なる症状の爲めに癩と誤認せられ永年厄介視されて來たが本園を訪れしによりてレ氏病の診断を下した譯である. 又最近之と正反對の場合を経験せり. 即ちある妙齡の一女性が顔面結節狀發疹の主訴を以て醫師を訪れレ氏病の診断を受け家庭にあり懊惱せるを聞き又實際は結節癩らしいとのことを知り我等の仲間で検診收容した. 多分診察せる醫師の政策的にレ氏病の診断を下せるものと思はる. 世人の癩に對する理解, 癩療養所收容能力増加, 癩療防法徹底によりてより容易に癩患者收容の行はれんことを望むものである.

追 加

保 田 耕 (長島)

該患者には兩眼虹彩前面に特異の小結節多發せり. 主として大虹彩輪に生じ大小種々の形の結節狀隆起或は不整形扁平斑となれり. 色は虹彩と同色又は稍々淡し. 瞳孔縁には灰白色滲出物附着あれど何等炎性症状を認めず. 此小結節は從來高橋氏, 大矢氏等數名の學者によりて報告され居るものにして恐らく虹彩前實質葉の神経纖維腫ならむと考へらる.

質 問 小池 藤太郎 (岡山)

レ氏病の腫瘍が Van Gieson 氏染色によりて黃色を呈する理由如何.

答 難 波 政 士 (長島)

腫瘍結締織分化幼なるが爲めに Van Gieson に對し黃色を呈するものと思はる.

癩患者の體格に就て (第 1 報)

(特に少年少女の體格)

立 川 昇 (長島)

癩患者の體格に就ては我が國に於ても既に數氏の報告があるが余も癩患者の體格に就て先輩諸氏の業績の追試を行ふべく着手した. 第 1 報として 7 歳より 17 歳に至る癩兒童 78 名の體格に就て調査を行つた病型別にすると

結節型 45 名 (男兒 38 名 女兒 7 名)

神經型 22 名 (男兒 18 名 女兒 4 名)

斑紋型 11 名 (男兒 2 名 女兒 9 名)

測定方法は一般の方法を用ひたが今回は體重, 身長, 胸圍等にのみの成績を文部省發表の全國兒童の體格と比較して述べたいと思ふ. 尙ほ男兒 58 名の睾丸の所見をも記述したり.

(I) 身長に就て

イ) 結節型 癩男兒は一般兒童より低い, 癩女兒は本統計中では一般兒童より高い.

ロ) 神經型, 斑紋型 結節型男兒より高いが一般兒童よりは低い, 女兒は(イ)の場合と略ぼ同様である.

ハ) 結節型では重症のもの程身長が低く, 輕症のもの程一般兒童の身長に近い.

(II) 胸圍に就て

イ) 結節型 男兒は標準兒童より狭いが女兒は健康女兒のそれより廣い.

ロ) 神經型, 斑紋型 男女兒共一定しない.

ハ) 結節型では重症なもの軽症のものに比して胸圍は減少して居るが極めて僅少である。

(III) 體重に就て

イ) 結節型 男兒は健康兒童より軽いが差は僅少である。女兒は健康女兒より體重の多いものもある。

ロ) 神經型、斑紋型 男兒は大部分結節型より重いが健康兒童よりは體重が少い。女兒の大部分は癩男兒より重い。

ハ) 結節型に就ては重症のもの程體重が減少して居り軽症のもの程健康兒童の體重に近い(神經型、斑紋型に就ては症例が少ないので病症の重軽による影響を比較することは困難である。)

(IV) 體重 身長に就て

結節型男兒の價は神經型、斑紋型男兒の價より大である即ち結節型男兒は體重増加に比例すると身長發育は劣勢であることを知る。女兒に就ては病型の間に大差はない。

(V) 身長 胸圍に就て

結節型男兒の價は大體に於て神經型、斑紋型男兒の價より小である。女兒の場合には大差はなく以上の結果から癩兒童は一般健康兒童より體格が劣位にあることを知る。甚だしい例では17歳になつても全く Infantilismus の所見を見る例もある。

何故に癩兒には身體の發育障礙がおこるか、先輩諸氏は癩が極めて慢性疾患であること内分泌障礙によること精神上の打撃等をあげて居るが更に又神経血管系の變化、骨髓の病的變化等をも夫々其の因子をなして居て其の原因は眞に複雑なるもので連斷は出来ない。

結節型と神經型、斑紋型との間の體格上の差異男兒と女兒との間の發育障礙は一方には強く他方には全くないか極めて軽度であるかと云ふ事等も極めて興味ある事である。唯辜丸と卵巢との病理解剖上の變化はこの間の理由をある程度迄説明を

與へるが、これでも不充分な點が存在する。之等の點に就ては更に充分研究を重ねたいと思ふ。尙ほ辜丸の所見は神經型、斑紋型の場合は比較的發育が良好であるが、結節型の場合は辜丸の發育は著しく障礙されるか遅延されて小兒型のものが15歳以上22名中10名(45.4%)ある。尙ほ結節型男兒に於ても辜丸に癩結節の發生して居るものは極めて少いものである。

光田氏反應成因に就ての考察

早田 皓(長島)

原著に譲る。

癩患者に來る眼筋麻痺に就て

内田 守(長島)

癩患者に於て癩を原因として來る眼筋麻痺の有無は極めて興味ありて今日迄の檢案にては發見したる人なし。余は本年8月以來如上の例と思はれる3例を得しかば報告す。第1例 中○久、23年、12歳發病、神經癩、顔面神經麻痺、瞳孔散大、檢査の結果、左眼に中等度内直筋麻痺を認めたり。第2例 難○練、28年、11歳發病、8年前より右眼瞳孔散大且複視あり、檢査により右眼に同側性複像を作り中等度外直筋麻痺あり。第3例 永○ト○、51年、33歳發病、7—8年前より顔面神經麻痺且兩側瞳孔散大、5年前より複像、兩眼同側性複像を呈す。以上の内1例は動眼神經内直筋枝不全麻痺、他の2例は外旋神經不全麻痺にして何れも高度の顔面神經麻痺及び動眼神經末梢麻痺に由る瞳孔散大症を合併、内直筋麻痺ありしものは延髓麻痺も合併せり。

以上癩性變化と密接の關係あれば癩性眼筋麻痺と稱して可なるべしと思惟す。

鼻腔内の癩腫に就て

田 尻 敢 (長島)

結節癩の経過中に鼻腔内の粘膜に癩結節 (即ち癩腫) が出来る事は稀ではない。Gerber, Sokolowsky 或は Blohmke 等は有莖癩腫 (Gestieltes Leprom) として記載してゐる。其の結節は粟粒大、米粒大より次第に大きくなり大豆大、蠶豆大に至つて中には有莖を示すものもある。之がため鼻閉塞を來して切除の必要が生ずる。余は愛生園内に於て鼻腔内の癩腫を有する者 16 例を得たので之が大略を報告せんとす。即ち

(1) 鼻内に癩腫を有する 16 例を検査した。

(2) 鼻内の癩腫 (癩結節) は必ず結節型に限られ、其の發生時期は輕症のものは少いが神經型より移行後最初の結節が鼻内に生じた例もある。併し一般に中等度、重症者に多い。

(3) 性によつて之が發生の差別はない。

(4) 發病後早くて 2 年、結節型に移行してから早くて 1 年にして鼻内に癩腫を生じた。元來之は皮膚の癩性浸潤或は結節と同様に消長があるのであまり意味はないが、余の例では最も長きもの 29 年、平均 14.1 年。結節型に移行後の年數平均 8.7 年である。

(5) 癩腫の箇數は多數のものもあるが、大なるものは 1 箇或は 2 箇で夫れ以上同時に出来る事はない。時には極小なる結節が多數に見られる事があるが、余の症例には之等を省いてある。大きいものは長さ 2.5 cm、太さ直径 1 cm 以上に至るものがある。

(6) 形狀は圓形或は橢圓形、基底は廣く粘膜につくものもあり、短き太き柄を有するものがあり、

時には細長い柄 (有莖) があつて可動性の癩腫を見られる。

(7) 發生する場所は中隔上部、中甲介に多いが時には下甲介より生ずる事もあり、キーゼルバツヘ部位より生ずる事もある。

(8) 外鼻の狀況或は全身症狀とは一致しない事がある。例へば、結節が全身皮膚になくて鼻内のみ癩腫の生じてゐるものもあり、時には癩性浸潤の吸収期にも尙ほ鼻内には之が残存する事がある。併し結節型の結節浸潤期に之が見られる事が最も多い事は勿論である。

(9) 之を切除しても再三再發する事がある。鼻茸用絞斷器、鼻内剪刀で切除して 1 日「ガーゼ」の「タンボン」を挿入しておく翌日には大概は血も止つて手術は簡單である。

(10) 外觀は表面粗糙のものが多く、時には桑實狀をなせるものもある。平滑で鼻茸に似たるものもある。

(11) 組織像は重層扁平上皮を有し、時には上皮が剥脱し肉芽組織が之に代つてゐるものがある。夫等の直下に多くは癩組織の多くない結締織の増殖した 1 層があり、それより下層にゆくに從ひ肉腫様の癩性結節組織が見られ、「プラズマ細胞」、「マスト細胞」、淋巴球、類上皮細胞等の増殖が認められる。其の組織中には多少核の濃縮狀を呈せる退行變性の病變もあるが壊死を來せる部分はない。血管の新生は一般に少く、血管壁の肥厚せるものが多い。

(12) 之等の癩腫は鼻茸と似てゐるが主な判別點を擧げれば

	鼻 茸	癩 腫
場 所	主に中鼻道	主に鼻中隔
莖	長短があるが比較的長い	時には長いが多くは短、柄のないものもある

	鼻 茸	癩 腫
色	銀白色, 透明感, 光澤あり	肉白色, 不透明感, 光澤なし
表面, 形	滑澤, 圓形	粗糙, 形多くは不整形
數	多發性	大なるものは多く孤立性
鼻内(甲介)	濕潤, 肥厚性	乾燥, 萎縮性
病 型	病型を選ばず	結節型のみ
組 織 像	主に浮腫性纖維腫	癩性結節

生體內に於ける蒼鉛の顯微化學的證明法に就て 小池 藤太郎(岡山) 原著に譲る.

外見上類肉腫を思はしめたる結節狀

黃色腫の1例 小池 藤太郎(岡山)
31歳の男子, 10箇年前より兩側の肘及び膝部に對稱性に數箇の小腫瘍あり, 其の色調黃色に乏しく概ね淡紅色乃至暗紅色を呈し, 多くは孤立性なるも一部癒合し中心部の萎縮を示し, 一見類肉腫を考ふべきも組織的には黃色腫に外ならざりき. 本腫瘍が特に紅色を帯びしは其の部位的關係よりして器械的刺戟による血管の擴張新生に因るものなり.

臨牀瑣談 前田 與三郎(松山)
25歳男子に於ける右側腎膿瘍の一手術例を報告せり.

癩性動脈炎

光 田 健 輔 (長島)
神 宮 良 一

癩性靜脈炎としては其の變化甚しきものありて爲めに動脈の變化は觀却せられて居る状態であつた. 今動脈に就て其の變化を検索せるに大動脈にありては, 重症結節癩18例に就て胸部及び腹部大動脈を検せるに其の中12例にありて極く僅な菌が内皮に寄生せるものもあるも大なる變化なく又股動脈, 脛骨動脈上部にありては又殆ど變化なく其

の下部にありては其の動脈の直徑15mmにありては菌の寄生及び癩變化の強度のものあり. 又前膊に於て肘關節の下部, 腕關節, 拇指及び小指第1關節の部に於て横斷各部の動脈を検するに, 前膊上部にありては尺骨及び橈骨動脈にありても其の變化輕度にして癩菌の寄生も比較的少なし. 腕關節部にありては外膜に癩細胞に癩菌を多數に宿し内膜の肥厚筋層にありても癩性變化を示す. 拇指及び小指横斷皮膚に於ても内膜の肥厚と癩菌の筋細胞内膜細胞中に侵入するを見る即ち橈骨動脈の變化は末端に至るに従ひ次第に増強するものと斷定するを得べし.

要するに結節癩の動脈にありては大動脈にありては殆ど癩性變化を認めざるも末梢に至るに従つて癩菌の寄生及び癩性變化の増強するを認む.

腎臟結核の診斷補遺

根 岸 博 (岡山)
江 原 敏 夫

演者等は腎結核患者52例に於ける臨牀的症候竝に検査所見と手術剔出せる患腎の病理解剖的所見とを對比して兩者の異同を論述せり.

「呼吸性ピエログラム」に就て

根 岸 博 (岡山)

正常腎, 結石腎, 膿腎等に就て「呼吸性ピエログラフキー」を行ひ其の定型的のもの數葉を供覽せり.